

令和7年度 研究の概要

B5グループ

⑧田代小 藤川 康平 笹島小 高木 健志 宝南小 澤井 剛
表山小 鈴木 皓太 北一社小 中村 萌

既習と本時の学習内容のつながりに気づき、問いをもって学ぶ子どもの育成

1 研究のねらい

本グループでは、子どもたちが既習と本時の学習内容のつながりに気づき、問いをもって学習に取り組む姿を目指して研究を進めていく。私たちの考える「既習と本時の学習内容のつながりに気づき、問いをもって学ぶ子ども」とは、これまでの学習で得た知識や考え方（以下：既習事項）を本時の学習でも活用できないかと考えたり、算数学習における系統性を意識したりすることができる子どもである。具体的には、既習事項と本時の学習内容との関係性を捉え、これまでの学びを手掛かりにして新しい問題に挑戦したり、本時の課題を解決する上で有効であった既習事項に気付いたりする姿を想定している。

しかし、本グループの学級の実態を見ると「未習の問題に対して手が止まってしまう」、「既習の学習内容と本時の学習をつなげて考えることが難しい」、「本時の学習の内容を理解することができない」といった様子が多く見られる。これらの原因として、以下のことが挙げられる。

- 既習事項が本時の問題の解決に活用できることに気付かせるための工夫が足りなかったため、解決に使えるような既習事項を想起することができない。
- 本時の問題と既習内容のつながりに気付かせるための工夫が足りなかったため、子どもたちにそれらの関係に気付かせたり、既習事項を想起しようとさせたりすることができなかった。
- 本時の問題が解決できても、活用した既習事項に目を向けさせるための工夫が不足していたため、手続き的な理解に留まってしまい、内容を理解させることができなかった。

そこで本研究では、1時間の授業の中に【既習と本時の問題の関係を捉えるための工夫】【既習と本時をつなげるための工夫】を取り入れて実践を積み重ね、目指す子どもの姿に迫っていく。

2 研究の内容

手立て① 既習と本時の関係を捉えるための工夫

問題との出合わせ方や発問を工夫し、既習と本時の問題の相違点や類似点を見つけたり、本時の課題や解決の糸口をつかんだりすることができるようにすることで、既習と本時の関係を捉えることができるようにする。

手立て② 既習と本時をつなげるための工夫

板書に解決方法だけでなく、子どもの思い（分からない、できない、難しい、困った、できそうなど）を残し、視覚的にその時の思いを捉えることができるようにする。そして、板書を用いて本時の学習を振り返り、本時の問題を解決するのに有効であった考え（既習事項）に気付かせることで既習と本時をつなぐことができるようにする。